

● 関西

嶋田邦雄

演奏会の取材に向かう途上、ターミナル前の道路広場でデモの流れに出会った。演説が始まっていた。女子学生だろうか。激しない、音楽的な声で語っていた。「…小さい国でいい。戦争とは無縁の、民主主義や文化が大切にされる社会こそ私たちの希望なのです…」。「そうだ」と思う。関西での2015年の演奏会は盛況だった。オーケストラの定期演奏会を新たに2日に増やした京都市交響楽団や日本センチュリー交響楽団の会場もそれなりの聴衆を確保している。リサイタルなども会場不足などの問題を抱えながらも数多く、例年ベートーヴェン「交響曲第9番」ばかりが目立つ12月に、一般の演奏会も犂めき合うように並んだ。しかし、あるオーケストラの会見で、楽員たちの経済面での苦境が明らかになった。トゥッティの所得は年240万円、首席で年336万円と言う。もちろん、ここより良い条件の楽団もある。しかし、どこも月のうちほとんど毎日を各種演奏会とそのブローベで過ごす。演奏水準をさらに高めるためには経済面での高上げが欠かせない、と苦悩する状況は同じだ。文化は大切にされているか、が改めて問いかけてられている。

オーケストラでは大阪フィルハーモニー交響楽団が座席数の多いフェスティバルホール(2,700席)での“定期演奏会2日公演”を定着させた。ラドミル・エリシュカ指揮のドヴォルジャーク「スターバト・マーテル」(6月定期)や井上道義・指揮のショスタコーヴィチ「交響曲第7番“レニングラード”」(11月定期)などに示されたように、長い熱い拍手に包まれた満席の会場が聴衆の熱い支持を示している。2016年も首席指揮者の井上道義を中心に、桂冠指揮者の大植英次やK.ウルバンスキ、S.ヤング、J.フルシャなど内外の注目の指揮者、演奏者をラインアップしている。京都市交響楽団は常任指揮者の広上淳一、常任首席客演の高関健、常任客演の下野竜也、桂冠の友直人に客演のR.トレヴィーノ、J.アクセルロッド、V.アシュケナージらを加えた陣容でコクのあるプログラムを提示。4回実施した“定期2日公演”も充実した内容がファンの熱烈な拍手に支持され、毎回ほぼ満席を確保。楽員の演奏力量の高さは指揮者たちにも意欲的な試みを誘うようで、高関健によるショスタコーヴィチ「交響曲第8番」(3月定期)や小泉和裕のブルクナー「交響曲第4番」(6月定期)など注目の公演も。日本センチュリー交響楽団も2015年から“定期2日公演”に踏み切った。首席指揮者の飯森範親、首席客演のアラン・プリバエフを中心に、古典派、ロマン派の主要曲目やマーラー、ショスタコーヴィチなどにもレパートリーを広げ、充実したプログラムでセンチュリー・ファンの熱い支持を獲得している。2回公演もほぼ成功。いずみホールでの定期演奏や地方都市での公演なども定着させて「新しいファンの獲得にも自信がある」(飯森)と意欲的な企画が相次ぐ。飯森によるマーラー「大地の歌」(4月定期)やプリバエフによるショスタコーヴィチ「交響曲第5番」(10月定期)など、印象的な公演も多かった。兵庫芸術文化センター管弦楽団は2015年で創設10年。当初から“定期3日公演”を続けて来たが、これが他の楽団への刺激になったのだろうか。毎回満席の熱い雰囲気楽団が力強く下支えている。一般楽団員の「5年入れ替えシステム」は演奏力量の蓄積にマイナスに働くのでは、と危惧されているが、音楽監督・佐渡裕を中心

に、多彩な客演指揮者たちがその“音楽”を必死に注入することで懸案に立ち向かっている。ユベール・スターンのシューマン「交響曲第2番」(6月定期)など注目された演奏も。関西フィルハーモニー管弦楽団は音楽監督のオーギュスタン・デュメイとヨーロッパ演奏旅行を果たした経験が自信となって、演奏内容も豊かな実りの状態を続けている。首席指揮者の藤岡幸夫、桂冠名誉指揮者の飯守泰次郎も加わり、古典派やフランスもの、シベリウスやブルックナーなど得意のプログラムで定期演奏会を彩った。飯守によるメンデルスゾーンのオラトリオ「聖パウロ」(4月定期)、藤岡のシベリウス、吉松隆作品(10月定期)などが話題を呼んだ。大阪交響楽団は兄玉宏が音楽監督として最後の年を送った。2016年度からはミュージック・アドバイザーに外山雄三を迎え、常任指揮者の寺岡清高とのコンビに新鮮な客演陣を加えた新布陣で臨む。2015年は篠崎靖男によるシベリウス「交響曲第1番」(10月定期)や寺岡のマーラー「交響詩《葬礼》」等、マーラーに絞ったユニークな企画(12月定期)が目立った。2016年はダニエーレ・アジマン指揮のメンデルスゾーン「交響曲第3番《スコットランド》」(4月)、外山による自作「オーケストラのための《玄奥》」(5月)、寺岡のツェムリンスキー「交響詩《人魚姫》」(12月)など注目の企画が並ぶ。

オペラ上演では関西二期会が創立50周年を迎えた。2月に記念公演として團伊玖磨作曲・木下順二台本の「夕鶴」を時任康文・指揮のザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団、中村敬一・演出で上演したのをはじめ、6月にはジョルダノ「アンドレア・シェニエ」をダニエーレ・アジマン指揮の大阪交響楽団、デジャン・プロシェフ・演出で、11月にはニコライの「ウインザーの陽気な女房たち」を十束尚宏・指揮の日本センチュリー交響楽団、岩田達宗・演出で上演する意欲的な活躍を見せ、それぞれに充実した舞台に結実。大阪音楽大学は創立100周年を記念して10月に、ザ・カレッジ・オペラハウスによるヴェルディの「ファルスタッフ」を下野竜也・指揮、岩田達宗・演出で上演、見ごたえのある舞台に仕上げた。ほぼ同じ時期に同じ内容の「ウインザー」と「ファルスタッフ」が同じ演出者で異なる団体によって舞台化されたのも面白い。びわ湖ホールプロデュースオペラはヴェルディの「オテロ」(3月)。沼尻竜典・指揮の京都市交響楽団、栗園淳・演出の舞台はイアゴの術策vsオテロの嫉妬との絡み合いに留まらない。黒人・オテロへの差別vsイスラムであることを捨てたオテロの苦悩といった深い内面への切込みが際立つ刺激的な内容に構成された。兵庫県立芸術文化センターの佐渡裕プロデュースオペラはヴェルディ「椿姫」(7月)をロッコ・モルテッリーティの演出で上演。映像を織り込む独自のスタイルを定着させた形。フェスティバルホールを舞台にした大阪国際フェスティバルではロッシェニの「ランスへの旅」(4月)がアルベルト・ゼッタ指揮のザ・カレッジ・オペラハウス管、松本重孝・演出で演じられたし、地域オペラでは川西市・みつなかホールを舞台にしたベッリーニ「ノルマ」(9月)が牧村邦彦・指揮のザ・カレッジ・オペラハウス管、井原広樹・演出で上演されるなど多彩だ。

室内オーケストラも旺盛な活動を繰り返す。オリジナル楽器でバロックから古典、さらには現代までの曲を巧みな企画で演奏会に組織する日本テレマ協会や宗教曲と日本の現代作曲家の合唱曲を演奏し続ける大阪コレグウム・ムジクム、洗練された企画と演奏で聴衆を開拓し続ける神戸市室内合奏団やアンサンブル神戸、京阪神在住のオーケストラ団員やソリストが自由な編成で室内楽を提供するアフター・アワーズ・セッションなどが定期的に質の高い演奏でファンを喜ばせている。